

便等は分解されて悪臭等の衛生面における不具合は発生しておらず、利用者からの苦情はない。

3 まとめ

当実践で建築したトイレ小屋は、木材を主に利用して、壁には土や竹を使用し、デザインも曲線を基本とし、森の小屋として周囲との違和感を与えないものができたと思われる。さらに、トイレとして2002年12月末段階で延べ100人近くの利用があったが、悪臭等は発生しておらず利用者から不満などは聞かれていない。したがって、環境と共生し、まわりの風土との違和感がないうえに、トイレとしての機能を十分に備えており、環境教育の拠点としてふさわしいものであると考える。

また、参加した大学生は、自分たちの手で沢から水を引き、森の木を切り、石を拾うなどして、できるだけ周囲にある自然を利用して小屋を造った実践を通して、資源の循環について学び、山で働く体験を自分のものとし、ものをつくる喜びを知ったようである。小屋が完成後は、ここを拠点として、小屋造りを通して自らの体験を深めた学生がインタープリターとなり、小学生、中学生を対象とした森での環境教育を展開していく予定である。

棚田に学ぶ環境教育 —その教材的価値の検討と実践研究—

徳島県勝浦郡上勝町上勝小学校 藤本 勇二

1 はじめに

日本各地には山から流れ出す水を蓄え、稲を育て日本の国土を守り、命を育んできた棚田（千枚田）がある。地域の自然や暮らしの姿を学ぶときには、それを見ていく窓のようなものが必要になる。棚田には、その役割が期待できる。授業実践を通じて身近な地域素材である棚田の環境教育教材としての価値の検討を目指した。

2 実践の内容

上勝小学校の6年生22名が主として総合的な学習の時間の中で全国棚田百選（農林水産省認定）の一つ「櫻原の棚田」を主な学習フィールドに「棚田のパンフレットを作ろう」をテーマとして実践した。

本実践の対象となった児童は4年生において総合学習「棚田たんけんたい」の学習を行っている。4年生の学習をポートフォリオ・壁新聞・記録の写真などを通して振り返ることから実践はスタートした。企画会議では棚田のパンフレットを作る計画を話し合い、棚田の取材を開始した。平行して学校周辺の棚田で生き物や植物を調べたり、全国の棚田百選のある自治体に手紙を出してその地域の棚田について知った。

棚田を考える会に協力していただき、棚田を守り続けてきた人々の工夫や努力（石積み、畦、米作り、用水路等）を探った。さらに棚田と谷川、周辺の森との関係を調べ、ビオトープとしての棚田を理解した。一方、棚田米を通じて地域の過疎や高齢化、棚田の荒廃の問題も考えた。

これまでの取材をもとに「上勝っ子新聞」、「パンフレット」とホームページを作成した。最後に見えてきた地域の課題、環境の問題について自分の考えや思いを出し合い語り合った。

棚田のパンフレット作りにかかわる体験活動や調べ学習を通して地域の問題や暮らしの課題と

いったことにも関心が深まり、地域の問題と未来をそこに生活する者として考えていく主体的な意識の育成に寄与することができた。

3 成果と課題

ウエビングマップによる棚田の教材性の検討や1年間の実践を通して棚田の教材的な価値が次のように明らかになった。

- ・地域を見ていく切り口としての棚田の意義
(棚田を通して、環境、くらし、農業、歴史、人のかかわりが見えてくる。)
- ・地域を知り、そのよさが分かり、地域にかかわっていかうとする棚田の役割
(これから生きていく地域をどうするかについて考えることができる。)
- ・棚田の持つ多面的な機能を理解する過程でもの見方を深めていくことが可能
(問題解決する力や総合的な認識力を育てる)

なおウエビングマップによる教材性の検討については以下に報告した。「藤本勇二, 2003, 棚田に学ぶ子どもたち—地域にかかわり自ら学ぶ子どもの育成—, 環境教育 VOL. 12 NO. 2 MAR. 53-61」

農業、自然、生き物、水利、食、人、文化、歴史等、棚田の教材が持つ多面的な機能と教育力は、地域の自然や暮らし、環境を具体的に理解し、地域の一員として生活や文化を継承しながら自分のできる方法で環境を守り、よりよい環境を作り自然と共存することのできる資質や能力を育てることに効果があると判断できた。

課題として学習の成果物をゴールとして設定する今回の学習課程では、パンフレットやホームページといった成果物のイメージを児童が共有することに時間を要することである。また棚田の圃場整備のように農家が直面する切実な問題を取り上げる際は抜く情報や協力いただくゲストティーチャー等多様な立場や視点が求められることである。

4 おわりに

棚田はそこにいけば多様な活動が生まれ、学びが生まれる場と考える。棚田を吹き抜ける風が伝

え、石積みが語る。棚田は米の生産の場としての水田と言うよりも、暮らしの場としての田んぼである。棚田の持つ豊かで大きな教育力は学校だけではその力を最大限に引き出せない。地域とのつながりが自然に求められ、「もの」・「こと」・「ひと」の関係が豊かに結ばれていく。今後も棚田の教材の可能性を拡げていきたい。